

南大分平野の施餓鬼(上)

目次

はじめに

一、上村の川施餓鬼

(イ) 古い行事

(ロ) 現在の行事

(ハ) 施餓鬼舟の作り方

(ニ) 川施餓鬼史料

二、八幡田の川施餓鬼(以下次号)

三、光吉の川施餓鬼

四、上宗方の川施餓鬼

五、下宗方の川施餓鬼

六、奥小路の御施餓鬼

佐藤満洋

七、豊饒の御施餓鬼  
八、施餓鬼の類型

あとがき

はじめに

大分川河口地域と大野川河口地域の間に展開する大分平野の海岸線一帯は埋め立てられて、いわゆる大分、鶴崎臨海工業地帯が造成されつつあり、これにより大分平野は農業地帯から工業地帯へと転換しつつある。それに伴い平野に点在する古い部落は自動車道路で結ばれ、住宅が部落と部落をつなぎ、古い部落は近代都市の一部に組み込まれつつある。

この現象はひとり大分平野のみならず、大分川をわずかにさかのぼった、いわゆる南大分平野にもみられ、日増しに住宅が増加し、平野の中央を流れる大分川及びその支流七瀬川流域に点在する部落は、大分市のベッド・タウンとして脚光をあびており、昔日の姿を失ないつつある。そして部落に古くから伝えられてきた有形無形の民俗資料は次第に姿を変えたり、人々から忘れ去られつつある。このため早急な民俗調査が望まれるし、民俗資料保護の必要が感ぜられるのである。このような観点から筆者は平野内の各部落の史料調査と合せて民俗調査をすすめているが、本稿はその成果の一として同平野の部落にみられる施餓鬼行事をまとめたものである。

現在施餓鬼行事の行なわれている部落をあげてみると大分市大石町（旧上村）をはじめ、同上宗方・下宗方・八幡田・明積（旧奥小路）・畑中・永興などの部落があり、また、現在は行なわれていないがかつては行なわれていた部落をあげると豊饒光吉・富岡などをあげることができる。そしてこれらの部落は一、二を除けばみな大分川流域の村々である。（第一図略地図参照）。

また同じ南大分平野の中でも昔から全然施餓鬼の行なわれていない部落をあげると大分川北岸の尼ヶ瀬と大分川の支流七瀬

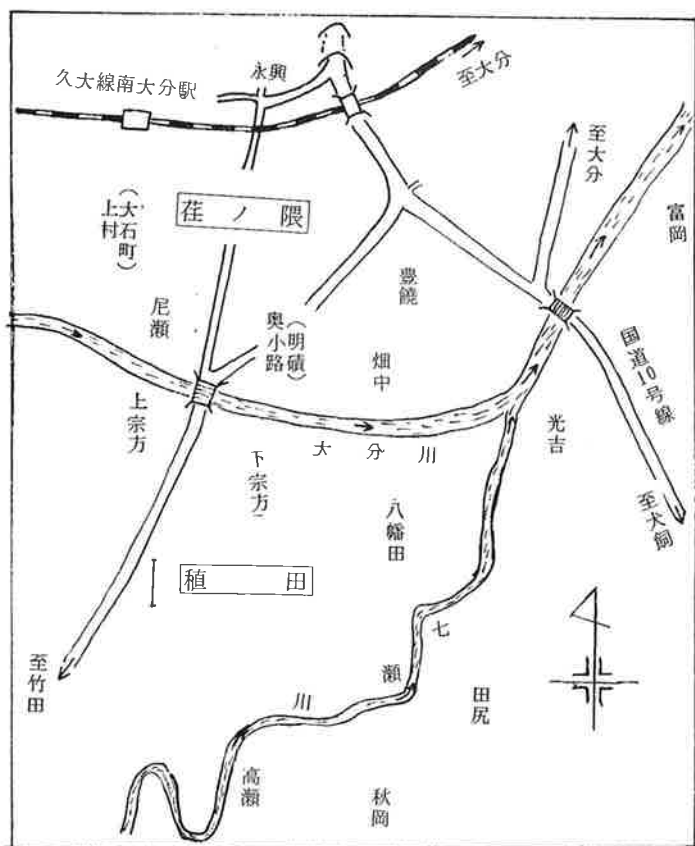
川ぞいの田尻・高瀬・秋岡などがある。

ところが大分川をさらにさかのぼって支流の賀来川と分れる付近、すなわち賀来や賀来川上流では現在でも行なっている部落があるし、大分川上流の向原付近でも行なわれており、さらに七瀬川上流の野津原町でも行なっている部落が若干ある。

このようにみえてくると施餓鬼行事は決して珍らしいというものではないが、その実施の方法は部落により多少の違いがみられるし、その実施の日もまちまちである。そしてさらに注目しなければならないのはこの施餓鬼の内容が大巾に変化したり、行事そのものが中止されたりする傾向にあることである。

そこで、南大分平野中心部で大分川兩岸に比較的近接している上村（現大石町）、奥小路（現明礮）・畑中・豊饒・上宗方・下宗方・八幡田・光吉などの部落の施餓鬼行事について考察してみたい。

とはいへ、わずか八か村の施餓鬼行事のみをもって南大分平野における施餓鬼行事全体について云々するつもりはない。しかし古い共同体単位、すなわち部落ごとの行事として実施されてきた施餓鬼行事について一応まとめてみるのも無意味ではないであろう。かような意味あいから本稿をまとめてみたが、検討不十分な点や独断的な面があるかと考えられるので、大方の御批判、御指導をいただければ幸いである。



(第1図) 南大分平野略地図

## 一 上村かんむらの川施餓鬼

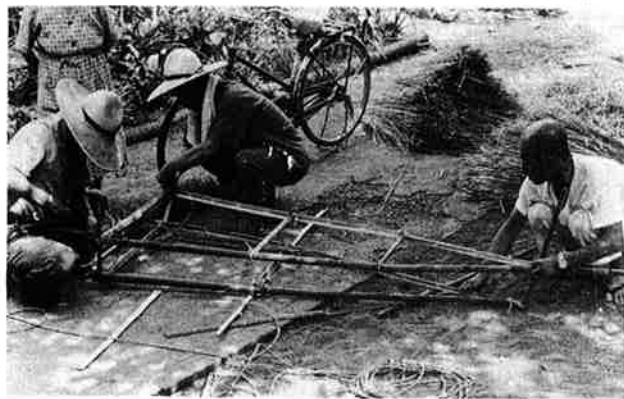
上村は第一図にみられるごとく大分川の北側に存する村で、古くは在限郷に属し、藩政時代には府内藩に属した村である。現在は大石町と改称され戸数は増加しているが、昔日の上村時代の風俗習慣はまだかなり残されている。この上村には夏の土用の三日目に竹と小麦稗で作った施餓鬼舟を大分川に流す川施餓鬼の行事が伝えられている。同村の臨濟宗聖養禪寺に伝えられている。明治二二（一八八九）年の史料によってみると、「川施餓鬼」と呼ぶのが正しい呼び方であることがわかるが、同村の人々は「オセガキ」と一般に呼んでおり、また別名「馬施餓鬼」と呼ぶ場合もある。そこで以下臨濟宗妙心寺派聖養禪寺住職鹿苑 附氏および同村の佐藤清人氏の話を中心に「オセガキ」について述べてみたい。

### (1) 古い行事

上村では古くは七島い栽培が盛んに行なわれており、大分川の川原や中島に七島いを干していたが、七島い運搬に使っていた馬が死んだことがよくあった。このため村内の牛馬の供養をするのがこの川施餓鬼の一つの目的であったようである。このため「馬施餓鬼」の呼び名が生れたものであるが、このほか無縁仏の供養も合せて行なわれていたようである。

川施餓鬼の行事は毎年夏の土用三日目に部落をあげて行なっており、この日は農作業を休むことになっていた。そして各家庭では、この日を「風変りかまがわ」と呼び、小麦餅を作ったり御馳走を作ったりして祝っていた。この日は各家から麦または小麦を一升あて取り集め、これを川施餓鬼の謝礼として聖養禪寺に納めたり、行事に必要なローンクや白紙類などを購入する諸経費にあてた。そして夕方から村の男しは聖養禪寺に集って夕食をすませ、それから境内で施餓鬼舟作りをしていた。

上村は通常上組・下組の二組に分かれていたが、施餓鬼舟作りはこの両組が一年交代で当番になり、材料の竹や小麦稗・七島繩などを組内から出し合せて舟作りをするほかに、小麦稗を小さく束ねて「クモデ」作り、供物を盛る小麦作りの「オハチ」作り、竹の上端を細かく割って作る灯籠作り、雌竹の幡竿（五〇〜六〇本）作り、竹筒の神酒スズ（一個）作り、麻殻を束ねた松明（三〇〜四〇本）作りなどを手分けして行なった。



施餓鬼舟作り  
 (写真一)  
 まず竹で舟の骨組み  
 を作る



(写真二)  
 小麦稈と杉の葉で  
 舟の化粧をする



(写真三)  
 できあがった施餓鬼舟

(写真四)

「クモデ」 村の牛馬の数だけ  
作っていた。竹にはローソクを立てる



(写真六)

大分川原に出た行列。  
昔の行列はにぎやかだった  
とハうが。



(写真五)

寺の庭で出発前の読経。



村人がこのような作業をしている間に聖養禪寺のオッサン（和尚さん）は施餓鬼舟に「極栗丸」とか「西方丸」などと命名して、白紙一二枚を継ぎ合せて作る帆に太々と墨書したり、白紙を四枚ないし六枚継ぎ合せて幡を作り、「奉請日本国伊勢大神宮」とか、「奉請日本国内一切明靈一切権現三界萬靈十方」等と、後掲の史料「川施餓鬼方式」に示されている一番の幡から二四番の幡まで六六本を書き、さらに色紙五枚を細長くはり継いで、「南無宝船勝如来」・「南無多宝如来」・「南無妙色身如来」・「南無廣博身如来」・「南無離怖畏如来」・「南無甘露王如来」・「南無阿彌陀如来」・「南無焦百大鬼王」等の、いわゆる「七如来」を墨書する。これらの帆や幡類が書きあげられると、帆や七如来および呪文を書いた幡は舟にとりつけられ、その他は雌竹の竿に結びつけて吹流しの幡が作られる。

このほかに餓鬼の供物として白米飯を炊いて里芋の葉に盛って小麦稗製のオハチにいれたり、「六味」と呼ばれる供物キユウリ二本・茄子二本・里芋若干・クロメまたはワカメ若干・菓子若干・素麺若干を里芋の葉に盛り施餓鬼舟に積み込まれる。また夏野菜をアラレ切りにして米一合〜一合五勺程度と切りませた「オセカケ」も用意される。このほかに水花や水桶・香爐香一〇把・神酒・ローソク一斤半が用意される。

諸準備が整うと聖養禪寺のオッサンと役僧二人による寺の本尊前での本尊回向が始まり、心経消災呪があげられる。続いて同寺の開山前で開山回向が行なわれ、大悲呪があげられる。やがて灯籠などに明りがつけられ寺の庭が明るく照らし出されると、庭前で太鼓や鐘などがにぎにぎしく三通りたたかれ、大悲呪があげられる。これが終るのが午後八時頃になるが、これからいよいよ施餓鬼舟の出発が始まる。

松明に照されて先頭を大幡の「奉請日本国伊勢大神宮」と書かれた幡が行き、以下後掲の史料に示す大小の幡六六本を部落の子供が持つて続く（上組、下組の関係なく）。そして幡と松明に護られるようにして施餓鬼舟が当番の組の人々にかつがれて寺を出発するのである。行列は聖養禪寺から村中を通して西方に進み部落のはずれまで行くと、ここでニギワイが起るのである。すなわち、部落の青年達が行列を待ち伏せていてかつがれている施餓鬼舟を奪い取るのである。青年達は奪った施餓鬼舟をかついで、部落の西側に広々と広がる栗畑（今日は水田になっている）の中に走り込むのである。舟を奪われた年寄達



は取り返そうとこれも粟畑に走り込めば、松明も幡も一斉に畑の中を走り廻り始める。上村のはるか上手にある賀来の片面付近の人々は飛び交う火（松明）の群をみて「土用の三日めの晩は上村の川原に狐火がでる」と不思議がったという。青年達はひとしきり粟畑の中を走り廻ったあと、時としては脱線して松明や幡を残したまま、隣近所の部落まで舟をかついで走り廻ることもあったようである。やっとの思いで青年達から施餓鬼舟を奪い返すと、さっそく船畑と呼ばれ三角状の空地になっている所（舟場とも呼ばれていた）に、施餓鬼舟を安置して鬼餓法要を始めるのである。ここでも大悲呪があげられ（無回向）、それが終ると再び行列をおこし大分川原に向うのである。河原では再び舟を安置し、舟の灯籠やクモデに灯がともされ、法要が行なわれる。鳴物が三回鳴らされ、旛香のあと聖養禪寺のオッサンが「古今六月設齋筵、読去読來勤普天、嚙字加字并露外、聞塵布水響潺夕」と香語を語り、続いて大悲呪があげられる。そして米と野菜を切りまぜて作ったオセカケがまかれる。法要が終ると施餓鬼舟とクモデは村人によって大分川に次々に流されるのである。クモデの灯が川面に光り、その中を施餓鬼舟が流れてゆく光影はみごとであったという。

この施餓鬼舟流しが終ると人々は部落に帰り、世話人は寺に集って直会をするが、青年達は村中の三叉路（広場のようになっていた）に集って盆踊りを夜遅くまでしていた。

この盆踊りの人々が踊りつかれて家路につくと、その時をもって御施餓鬼行事は無事終了となるのであるが、施餓鬼の行列に子供達がつかいだ幡は、それぞれの家に持ち帰って畑に立てると、河童が「これは上村の畑だ」といって作物を荒さないの  
でよくできるといわれていた。

#### (四) 現在の行事

以上は第二次大戦前までみられた、いわゆる上村時代の施餓鬼行事華やかかなりし頃の聞き書であるが、今日では戸数もかつての五〇―六〇戸から大きく増加して三百数十戸に達し、大石町と改称されているし、農業を専業とする家が少なくなっている。

る。このため施餓鬼の行事は一年も欠かさずに行なわれてきてはいるが、だんだん規模が縮小されている。

「オセガキ」の日になると戸当り五〇円ずつ取り立て、午後から当番に当たっている上組か下組の人々が聖養禪寺に集って施餓鬼舟作りをしている。しかし小麦稗は収納のあと田圃で焼きすてるため、年寄りがいて施餓鬼舟作り用の材料として、少しずつ取り残しておかねば小麦稗がなくなる危険性がある。また今日では上村では七島いをほとんど栽培しなくなっているので、施餓鬼舟作りに必要な七島繩がなくなる傾向にあるという。さらに位置的にも大分市の中心地に隣接しているため若い人々の農外職業につく例が多く、ここでもいわゆる三チャン農業が目につく。そして若い人々の間では民俗行事に関心を示さない人が増えつつあるようである。

このような諸条件が重なり、土用の三日に施餓鬼舟作りを觸れると、五〇円ずつはほとんどの家庭が出すが、施餓鬼舟作りに集る人々は地つきの年寄の人々だけである。このため舟の大きさも以前は二間以上のものを作っていた由であるが、今日ではその半分の一間前後になっており、幡は一本もみられず、クモデも作られなくなっている。また松明も形ばかりのものが一―二本みられるだけで、聖養禪寺から大分川原まで施餓鬼舟を運ぶのは小型トラックを使用するため、行列らしい行列にならず、村はずれでの昔日のような青年による賑いもなく、かろうじて施餓鬼行事を行なっているようにみえる。

上村の施餓鬼の起源については知ることができないが、かつて聖養禪寺が無住になったことがあったが、その時村人は他村の禅宗のオッサンに頼んで川施餓鬼をしたことがあったという。ところがその晩河童がきて聖養禪寺の門をゆさぶるという事件が起きたので、村人は臨済宗のオッサンを他村から招いて川施餓鬼をしながらという伝説が伝えられている。

それで旧上村の年寄りの人々は先租から伝えられた行事である川施餓鬼は、たとえ小規模になってもこの伝説とともに大事に保護してゆきたいと話しているし、聖養禪寺の住職鹿苑氏も「将来、仮りに上村の人々が川施餓鬼を中止するようなことがあったとしても自分は続けてゆきたい」と話しておられ、上村には民俗行事保存の気運はまだ十分にあるようである。

(ハ) 施餓鬼舟の作り方

次に上村で作られる施餓鬼舟の作り方について述べてみよう。現在の舟は昔日のものに比べると先述のごとく小さくなっているが、作り方はかわっていない由であるので、今日作られている方法について述べてみたい。

まず材料であるが、長さ二・五米位、直径四〜五糎の竹五〜六本と小麦桿二〜三束、七島いの小繩少々・杉葉少々・川藻少々・覺糸少々を当番の組の人々が持ち寄りでそろえる。また戸一升宛の麦または小麦を出し合せたもので（現在は戸当五十円）施餓鬼舟の帆をはじめ七如來の色紙や幡用の白紙・線香・ローソク等が用意される。

さて材料がそろえられると作業が始められるが、施餓鬼舟は図解(1)に示すごとく二・五米位の竹（長さは別に決っていない）二本の一端をそれぞれ七島繩で固く結び、反対側から静かに二つに割る。

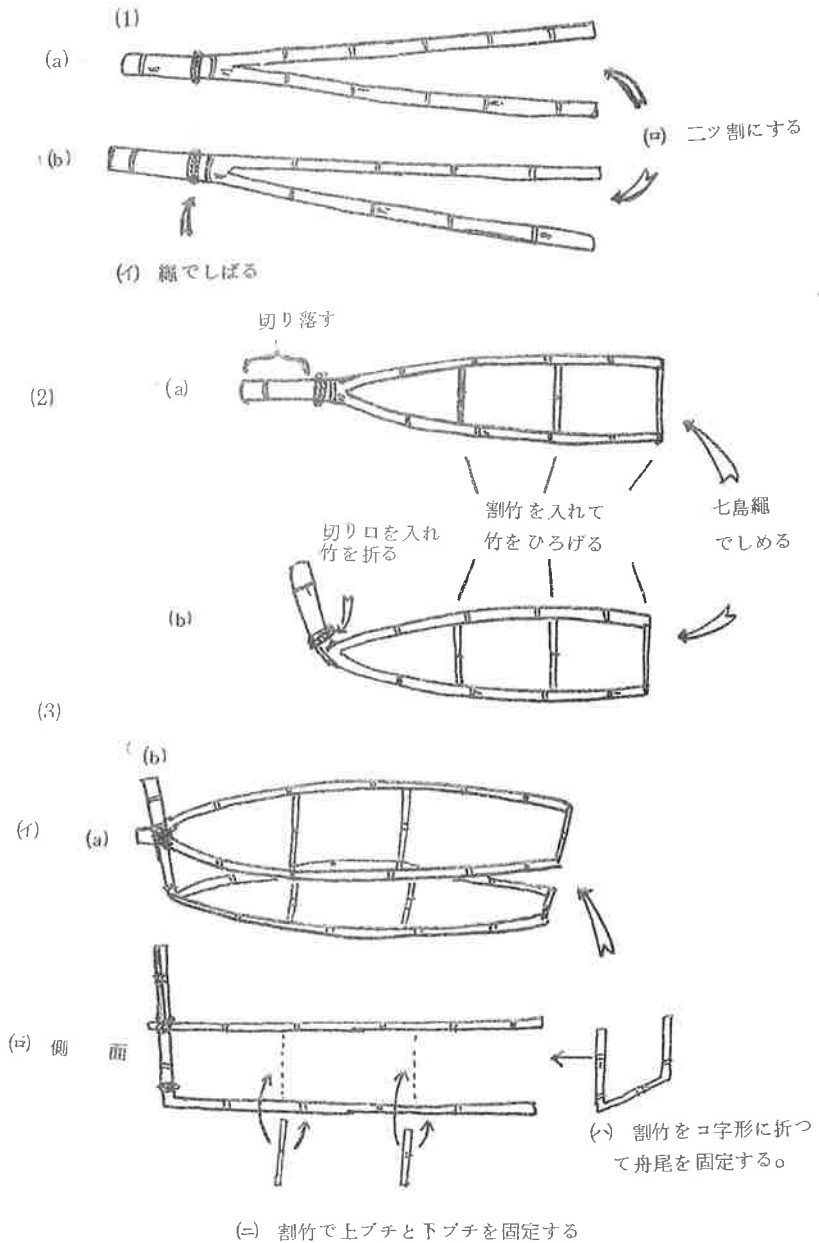
それから(2)のごとく一(a)は繩を残して端を切り落し、一(b)は繩の付近に切り目を入れて端を折り曲げる。また舟幅を作るために短かく切った(約五〇〜六〇糎)竹を二つ割にして(a)(b)の竹の中段と割口に入れて、(a)・(b)の竹を舟形に広げ、端を七島繩でしばる。

次に(3)のごとく(2)で折り曲げた竹(b)に(a)の繩元をかけて(b)の折り曲げた部分を舟首にして舟の骨組みを作る。そして舟尾にはコ字形に曲げた割竹を結びつけて(a)・(b)の竹を固定させる。さらに(a)・(b)の竹を固定するために支竹を入れて舟の骨組みができあがる。骨組みができあがると(4)のごとく舷になる(a)竹に小麦桿をまきつけ、舟底になる(b)竹とその支竹の上に小麦桿をきれいに並べて敷く。そして後で舟を運ぶ時に用いるかつぎ棒の竹二本を図(5)のごとく舟の下に入れ、小麦桿の上から押竹をあてて、押竹とかつぎ棒を七島繩で強くしばる。さらに二・三カ所に竹を上下から入れて小麦桿が落ちないようにしばる。

それがすむとこんどは舷側に杉葉をきれいに並べてさし、舟の側面および舟尾を作る。また(b)竹を曲げて作った舟首には川藻を結びつけて舟首を飾り、舟の中央に帆柱の竹を一本立てて帆綱を舟首と舟尾に張る（第六図）。

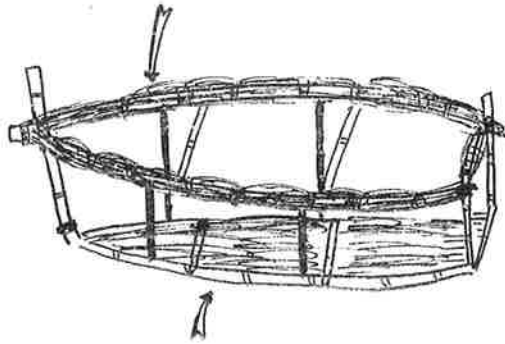
以上の作業と平行して付属品作りが行なわれる。

施餓鬼舟の作り方略図



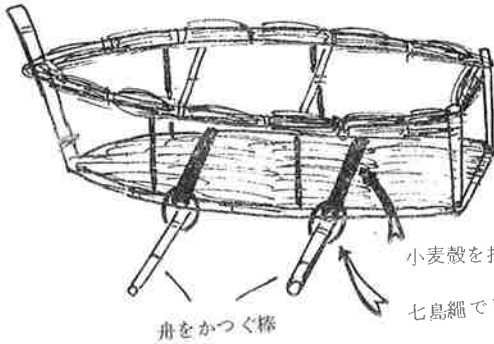
小麦殻をまきつける

(4)



小麦殻を底にしきつめる

(5)

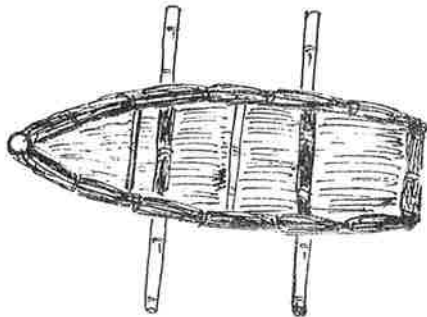


小麦殻を押える所

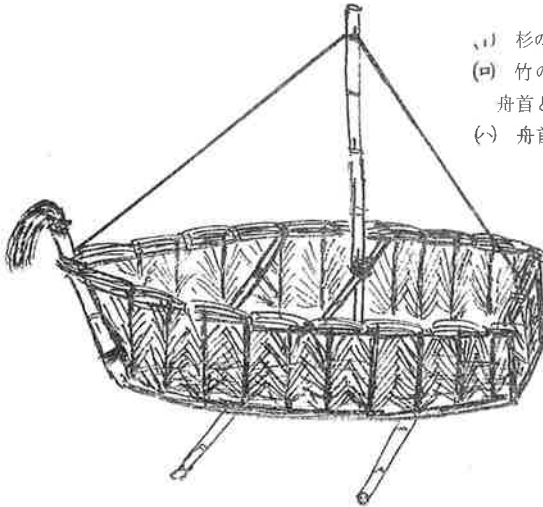
七島繩でしめる

舟をかつぐ棒

上から見た舟



(6)



- (イ) 杉の葉で舟腹をおおう
- (ロ) 竹の帆柱を立て、帆網を舟首と舟尾に張る
- (ハ) 舟首に川モを結びつける

(7) 付 属 品

(イ) クモデ (牛馬の教作る)

小麦殻を二つ折りにしたものを2個作り、一で他を挟むようにして、T字型を作り、その根元を縄でしめる。そして上に竹ヒゴのローソク立てをさす



(ロ) ローソク立

竹ヒゴを作り舟の藪やクモデにさし、それにローソクを立てる。



長さは約15cm

(ハ) 舟尾に立てる灯籠 (2本)

- 竹の端を細く割り七島で編んだ上から白紙をはる。
- 長さ約60cm



(ニ) オハチ (1個)



小麦殻をウズ巻様にまきあげ、畳糸でとじて全体を作る。

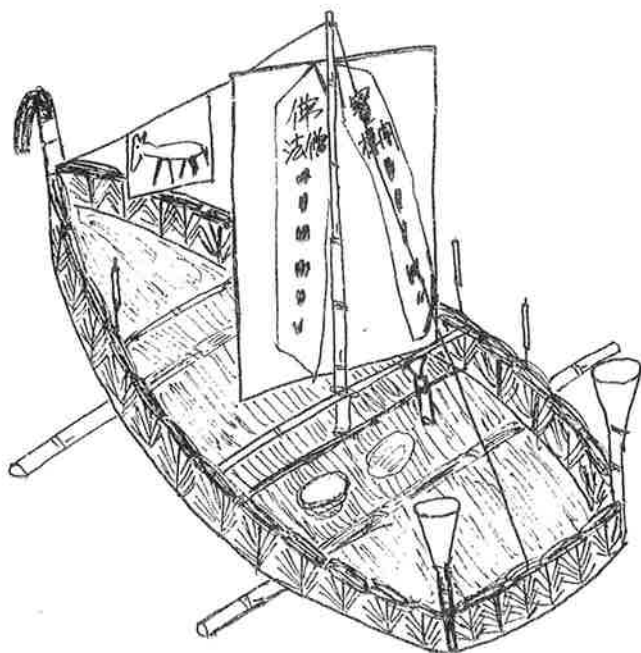
(ホ) 神酒スズ入 (1本)



竹筒

(8) 完成見取図

- (イ) 帆網の前方に馬の絵をはる。
- (ロ) 帆柱に帆と呪文2流をつける。
- (ハ) 帆網に七如来をさげる(省略)
- (ニ) 舟尾に灯笼2本を立てる。
- (ホ) 両舷にローソクを立てる。
- (ヘ) 供物は後方に乗せる。



(7)の(ロ)に示すような小さな割竹でローソク立を作り舷側の小麦稈に立てる。また七〇〜八〇程の竹の一端を小さく割って、それを七島いで皿状に編みあげ、その外側に白紙をはって灯籠を作る。これを二本作って(8)に示すごとく舟尾の左右に立てる。このほかに小麦稈を小さく束ねて渦巻様に巻きあげ、これを疊糸でとじて餓鬼の食を入れるオハチを一個作り、一端に節を残した竹筒の上部を(7)図(ホ)のごとく刻んで神酒スズを作る。これで現在使っている舟の付属品はできあがりであるが、以前はこの他に(7)図(イ)または写真(4)のようなクモデを作っていた。

このクモデは村中の牛馬の数だけ作ることにしていたが、作り方は、小麦稈を小さく束ねて二折りにしたものを二つ作り一を横軸にして他の一つの小麦稈束でその中心部を狭んでT字型を作り、狭み口を縄でしぼるのである。そしてそのT字の交叉部に竹を割って作ったローソク立を二本つきさすのである。このクモデが村中の牛馬の数(毎年三〇〜四〇頭いた由である)だけ作られるので、小麦殻がかなり必要であった。

このほかに現在は形式的に一・二本に減っているが、麻殻を束ねて作った松明が三〇〜四〇本用意され、幡竿として雌竹六本が用意されることになっていた。

このような諸準備ができあがると、この間に聖養寺のオッサンが書きあげた舟の帆と呪文を舟の帆柱に結びつけ、帆綱に色紙で作った七如来が万国旗のごとく結びつけられる。

また、村人のうちで絵の上手な人が馬の絵を書いてそれを舟首近くの帆綱の前に向けてはりつける。一方、大小六六本の幡竿にはそれぞれ吹き流しの幡を結びつけたり、舟尾の方には先項で述べた供物や神酒スズを積み込み、最後に舷側および舟尾左右の灯籠に、それぞれローソクを立てて施餓鬼舟作りの作業一切が完了するのである。

そして先述の通りの施餓鬼行事が行なわれるのである。



(二) 川施餓鬼史料

次にやや長くなるが増養禪寺に伝えられている上村の川施餓鬼を伝える史料を紹介してみよう。同史料は明治二十二年に同寺の心伝和尚が書いたものであるが、史料中に幡の本数を示した箇所があり、続けて「右三十五之幡規定外・近年新添ス六十戸へ配分スル共残リアリ、若シ巷戸へ四五人ノ童子相用ル時ハ必ず不足セリ云々」<sup>・</sup>「此外買物等ハ別記ス、如是規定是レアルニ付、令改之置<sup>・</sup>」と書かれているが、これは明治二十二年以前に施餓鬼の方式を伝えたものがあつたことを示しているようである。それを新しく書き直したものがこの史料であるように考えられる。

上村における川施餓鬼の起源を知る史料はないが、本史料は比較的古い方式を伝えているようであるので、先述の行事と考へ合せて、本史料をみていただければこのことがよくわかるであろう。

なお史料中■は墨抹で原字不明、△は墨抹、(マ)は誤りないし意味不明、(カ)は推定、(一)内は筆者の案、「」は朱書を示すものである。

(表紙)

土用三日ノ村中

川 施 職 鬼 方 式

明 徳 山

(縦) 一六  
(横) 二六  
一八

一番

大幡中タケ五枚 (マ) ツキ ■

奉請日本国伊勢大神宮

貳番

全

四枚 (マ)

奉請八幡神社

(朱書) 『朱書』

参番

全

奉請春日大明神

第四番 中タケ五牧 (マ)

奉請賀茂下七大明神 (朱書) 『九字』

弟五番 中タケ六牧 (マ)

奉請九州豊後大分郡寒田三位長河水鬼神 (朱点)

弟六番 中タケ半五牧 (鉛筆)

奉 請 日 吉 山 王 祇 (朱書) 『七字』

弟七番 全 (鉛筆) 『五』

奉請天満大自在天神 (朱書) 『九』

弟八番 中タケ本五牧 (マ)

奉請当所若宮八幡神社 (朱書) 『十字』

第九番 中タケ本五牧 (マ)

奉・請・水・天・宮 (朱点)

弟十番 中タケ本五牧 (鉛筆) 『四』 (マ)

奉請善神王宮 『六字』 (朱書)

弟十一番 中タケ本牧 (マ) 『四』 (鉛筆書)

『不用』奉、請、元、孝、利、貞 (朱書) 『四字』 (朱書)

(朱書) 『四字』 (朱書)

弟十二番 中タケ半五牧

奉請・當山・鎮守・秋葉山大 權現・

弟十三番 中タケ七牧

奉請當寺開山。敕謚德興下上。聖真上。禪師。大和尚『十七字』

弟十四番 中タケ本七牧

奉請日本國內一切明靈一切權現三界萬靈十方至聖

弟十五番 四天王中タケ半五牧三ツ切

分年筆書 六牧切 ノコル四本

東方持国天王南方增長天王

西方廣目天王北方多聞天王

弟十六番 中タケ本七牧

佛僧掩摩呢囉哩吽若人欲了知三世一切佛  
法囉摩呢囉哩吽應觀法界性一切唯心造

第十七番 全

實閣ダラニ 汝等鬼神呪我公施汝供  
此食遍十方一切鬼神若

〔寫本〕「廣開甘露門」

轉無上法論

〔寫本〕「四百枚三十三キル半ノコル」〔鉛筆書〕「三」

〔マ〕「先」廿二「パン迄入ル」

第十八番

〔寫本〕「四百枚ヲ三十枚キル」

遊

南無清淨法身毘盧那佛

〔赤筆書〕

全「円満法身盧遮那佛

『四枚ツギ  
ニシテ

全「千百化身釈迦牟尼佛

二十八枚  
キル」

全「當來下生彌勒尊佛

昭和十七  
年ノ  
時

南無十方三世一切佛

〔寫本〕  
〔生〕大聖文殊文師利菩薩

〔寫本〕  
全「後」大悲觀世音菩薩

〔寫本〕  
全「前」大行普賢菩薩

全諸尊菩薩摩訶薩

全磨誨般若波羅密

〔マ〕  
第十九番 中タケ半五枚

南無西方無量壽尊佛

(マ)

全二十番 中タケ半五枚

南無大勢至菩薩

全廿一番 中タケ半五枚

(マ)

南無延命地藏願主菩薩

(マ)  
弟廿二番 七如来色紙 二面

八本舟ノ中

南無寶勝如来

南無多宝如来

南無妙色身如来

南無廣博身如来

南無離怖畏如来

南無甘露如来

南無阿彌陀如来

南無焦面大鬼王

(マ)  
弟廿三番

(異筆)

〔四百枚三十一枚キル〕  
〔マ〕〔五〕  
〔中タケ〕タテ三切六枚ツキ

(万年筆)

〔五〕(万年筆)

十六羅漢名規定外若幡不ナル

十六神王名書ベシ半三切

〔五〕(万年集)  
〔半六〕(南無)不用修キ十九本  
〔(朱繪)〕

〔不用〕第一 西瞿陀尼洲 「中賓度羅跋羅墮聞

尊者

(朱繪) 以下同

〔弟二〕 迦濕彌羅中 「迦諾迦代瑤尊者

〔弟三〕 東勝身洲中 「迦諾迦跋致厘墮聞尊者

〔弟四〕 北俱盧洲中 「蘇實陀尊者

〔弟五〕 南瞻部洲中 「話距羅尊者

〔弟六〕 耽沒羅洲中 「跋陀羅尊者

〔弟七〕 僧迦茶洲中 「迦理迦尊者

〔弟八〕 鉢刺多擎中 「代門羅弗多羅ン者

〔弟九〕 香醉山中 「戊博迦尊者

〔弟十三〕 三十三天中 「半託迦尊者

〔弟十一〕 畢利鷲瞿洲中 「羅怛羅尊者

〔弟十二〕 半度波山中 「那迦屏那尊者

『<sup>(マ)</sup>』<sup>(マ)</sup> 弟十三廣脇山中「因揚陀尊者」

『<sup>(マ)</sup>』<sup>(マ)</sup> 弟十四可住<sup>(異傳)</sup>山中「伐那波斯尊者」

『<sup>(マ)</sup>』<sup>(マ)</sup> 弟十五鷲峰山中「阿氏多尊者」

『<sup>(マ)</sup>』<sup>(マ)</sup> 弟十六持軸山中「注茶半諾迦尊者」

『<sup>(マ)</sup>』<sup>(マ)</sup> 雞足山中「大迦葉尊者」

『<sup>(マ)</sup>』<sup>(マ)</sup> 恒河分身「阿難陀尊者」

『<sup>(マ)</sup>』<sup>(マ)</sup> 四大阿羅漢中「君屠鉢歎尊者」

ノ十九名号七如来ヲ除ク外是迄幡五十二本

右ハ羅漢ノ名ノミニテ書記ス事始終ハ手数ナリ

弟廿四番 <sup>(マ)</sup> 元中タケ立一<sup>(マ)</sup>牧<sup>(マ)</sup>ヲ三<sup>(マ)</sup>切<sup>(マ)</sup>五<sup>(マ)</sup>牧<sup>(マ)</sup>ツ、

<sup>(朱註)</sup> 『<sup>(マ)</sup>』<sup>(マ)</sup> 十六本

『<sup>(マ)</sup>』<sup>(マ)</sup> 不用 南無提頭賴吒神主

<sup>(異筆)</sup> 『四ツ切五枚ツギ  
二十枚キル事』

全 梵誓比叡神王

不入 南無跋折叡神王

全 迦毘叡神王



全 咩聞僧神王

全 鈍徒毘神王

全 阿休僧神王

全 姿休僧神王

全 印陀僧神王

全 姿姨僧神王

全 摩休僧神王

全 鳩毘僧神

〔入舟〕  
〔義尊〕〔僧〕  
南無真陀神王

全 跋吒從僧神王

全 俱鞞僧神王

都合幡六十七本ナリ、七如来共メ七十四ナリ

右三十五之幡規定外近年新添ス六十戸へ配分スル共残リアリ、

若シ壺戸へ四・五人の童子相用ル時へ必ず不足セリ云云。

一幡中タケ五枚ツギ九本

舟ノ帆十二枚

中半五枚ツギ (マ) 十七本

同 六枚ツギ (マ) 壹本

中半七枚ツギ (マ) 壹本

同 七枚ツギ (マ) 三本

壹枚 (マ) 五  
ツギ三千五中本

中タケ立テ三ツ切六枚五十四本  
ミミミミミミ

外

七如来色紙

都合六十六本

舟ノ内備物

一 餓鬼ノ食

一 六味 キウリニツ (ク)ロメカ  
ワカメカ

茄子 ニツ (菓)子

里イモ ソラメン

一 水花

中本四十五

六十四枚 (マ)

水桶、香爐、十(呪方)神香五已、御酒

經文ノ次第

一本尊前

(心經消災呪)  
回向

一開山前

大悲呪回向

一庭前テイ

大悲呪無回向  
ナリモノ三通

一道中

鳴物ニツゝ

一元ト舟場テ大悲呪無回向鳴物三通

一河原ニテ鳴物三通了而焼香

香語ニ曰

古今六月設齋筵

読去読来勤普天

呪字加字并露外

聞摩布水響ミヤ

次ニ大悲呪施餓鬼イスノダン丈ケフシ了テ傍嚴呪回向、次ニ鳴物三通

舟ノ帆中タケ立ツギ十二枚(マ)

中タケ六丈

色紙十五枚(マ)

線香十把

蠟燭壹斤半

大蠟六本  
ミニミニ

此ノ外買物等ハ別記ス、如是規定是レアルニ付、令改之置、

(裏表紙)

干時明治廿二五年旧六月吉辰

現 住 開 祖

心 傳 誌  
(花押)